

人を恐れぬサバンナヒヒ

アニマルフォトグラファー
トラベルライター

平 岩 雅 代

サバンナヒヒ(英語名はバブーン)は、霊長目オナガザル科のヒヒ属で、群れを作って集団で暮らしています。

アフリカには霊長目が多く、最大の体格になるのはマウンテンゴリラ(直立身長約2メートル)、次いでチンパンジー(同約1.6メートル)ですが、ゴリラ、チンパンジーのいずれも“森の住民”のため、最もよく見かけるのは、サバンナヒヒということになります。

サバンナヒヒはオスの体長が1メートルを超すこともあり(直立した場合)、体重はしばしば30キロにも達するガッシリした体格の動物です。時には100頭以上もの群れが、ひとときわ体の大きなボスに統率されて行動します。

サバンナヒヒのオスの成獣の顔は、長い鼻筋と犬のように尖った鼻先が特徴で、顔にはほとんど毛が生えていないように、ツルリとした印象です。窪んだ両目は小さく、目と目の間隔がとて狭くなっています。

ただしメスや子どもたちはそれほど長い鼻筋をしていません。オスの体毛はフサフサと厚く、胸から肩に筋肉が付き、見るからに貫禄たっぷりですが、子どもはニホンザ

ルや他のサルの仲間と同様やせて耳ばかりが大きく目立っています。

サバンナヒヒの食性はおもに草食で、草や根、木の実、花、果実などですが、他に昆虫、トカゲ、鳥の卵なども食べます。さらに鳥やウサギ、鈴羊類の幼獣などを捕らえて食べることもあります。私もオスのサバンナヒヒがトムソンガゼルの子獣をもも肉を、わしづかみにして食べている場面を見たことがあります。その姿が骨付き肉を食べる人間のように思えて、ゾツとしたものでした。

とはいうものの、サバンナヒヒの赤ちゃんが母親のお腹にしがみつくとように抱きか



写真1 母親に抱かれてお乳を飲む赤ん坊

かえられている姿や、尾の付け根に馬乗りになって胸を張っているような姿には、かわいらしさからつい微笑んでしまいます。

通常は見通しのいい草原に思い思いの姿で座り、せっせと両手で草や根を集めては忙しそうに口へ運んでいるサバンナヒヒですが、いつでも数頭のオスは群れの周辺でにらみをきかせ、警戒を怠りません。そしてひとたび異常事態が発生するやいなや、大声で「ギャー、ギャー」とサイレンを発します。すると群れはボスの引率のもと、一斉に移動を始めるのです。



写真2 思い思いのポーズでくつろぐサバンナヒヒ

サバンナヒヒの天敵はヒョウで、夜間、木の上で眠っているヒヒに向かって、ヒョウは恐ろしい唸り声をあげます。すると寝ぼけまなこで木から飛び降りたり、あわてる余り落ちたヒヒをヒョウはガブリと、捕食するのです。

ヒョウばかりでなく、ライオン、ハイエナ、ワニ、そして大形の猛禽類も手強い相手です。

サバンナヒヒは野生動物ですが、長年人間の近くに暮らして姿を見慣れてきますと、人を恐れなくなり、次第に大胆に行動するようになります。初めのうちはゴミ箱を漁るくらいですが、段々と畑を荒らしたり、ホテルやロッジの庭を我が者顔で歩き回ったり、食堂のテラスのテーブルから果物を失敬したり、ドアや窓を開け放したままの客室に侵入して荷物を引っかき回したり、果ては人間の子どもを襲って手に持っている食べ物を奪うという悪さまでするようになります。

野生動物に餌を与えることは固く禁止されていますが、一度でもおいしい食べ物の味を覚えたサバンナヒヒは、車のオープンルーフから車内に乱入し「何かうまそうな食べ物はないか……」という顔で物色するようになってしまいます。

数年前のことですが、日本からのある観光客が、ロッジの庭のテラスに置いておいた鞆の中から、サバンナヒヒにフィルムのを袋を持ち逃げされ、「私の大事な撮影済みフィルムを返してちょうだい」と、ロッジの従業員が追いかけてきましたが、とうとう取り戻せなかったというハプニングもありました。

〈サバンナヒヒひとくちメモ〉

▶東アフリカ各国（ケニア、タンザニア、ウガンダなど）で話されている公用語のスワヒリ語で、サバンナヒヒはニヤ

ニと呼ばれている。

▶野生のサバンナヒヒの寿命は30年ほど。妊娠期間はおよそ6カ月で、通常双子は生まれず、一子のみの出産となる。